

---

# IS-インフィニットストラトス-篠ノ之束の弟子

rei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS - インフィニットストラトス - 篠ノ之束の弟子

### 【Nコード】

N1965BA

### 【作者名】

rei

### 【あらすじ】

『IS』

その開発者である篠ノ之束は誰からも新の意味でISを理解されなかった。彼女の認識できるものたちは誰一人としてISを理解できない。使えるだけでは意味がない。彼女が求めていたのは理解してくれる人だった。そしてそんな人物が現れた。その人物は後にこう呼ばれるようになる

『篠ノ之束の弟子』と

## 東唯一の弟子（前書き）

なんとなく息抜きで書き始めました

感想募集中です

それとIS - インフィニット・ストラトス - 知識を求めるものも  
できれば読んでみてください

## 束唯一の弟子

『篠ノ之束』

稀代の天才であり世界を変えたISの生みの親でもある

しかしながら非常に気難しいというかとらえどころがないというか  
とにかく他人嫌いが過ぎる性格ゆえに自分とその身内しか認識しな  
い変わり者である

そんな彼女が認識できるのは4人

ブリュンヒルデ『織斑千冬』とその弟『織斑一夏』そして自分の妹  
『篠ノ之箒』の4人である

それ以外の人間は認識しないらしい

しかしそんな彼女が姿をくらませる時に一人だけ連れて行った人間  
がいたのだ

他人に対して関心を持たずまた、認識もしない彼女が世界から狙わ  
れ姿を隠すというときに一人だけ連れて行ったのだ

その人物は彼女が認識できる4人ではなくまた一切の経歴が不明の  
人物であった

---

??? side

ここは某所にある研究所

某所というのは実際のところここがどこだかよくわからないからだ

あの時急に束さんに連れられて世界を点々とすることになったからだ

束さんは開発したISにより世界から狙われる身

それによりひとつの場所に長いで見つかれば最悪命の危険すらあるという状況

それに動向している俺は束さん以上に危険な状況にあった

束さんはその能力ゆえにかまっても殺すには惜しいだろう

なので殺される可能性は低い

しかしながら俺はそんな能力もなく向こうからすればなぜか一緒にいた少年という認識のほず

さんざん拷問されたあげく殺されるのは目に見えている

なので逃げるときはそれこそ死ぬ気で逃げた

そのため何とか今まで生きているのである

それにしてもなんで俺ここにいるんだろうね？

俺は確かに両親を早くに無くしてそれから一人暮らし状態だったので別に誰も心配しないんだろうけどなんで束さんが俺を連れてくるのがよくわからない

別に俺は天才じゃない

もともと俺と束さんは知り合いというほどの間柄でもなかった

俺は両親を早くに無くしている

そしてその両親が研究者であってことからよく家にある両親の残し

た研究などを見ていた

それによつていろいろな知識をつけ論文も読んだ

そしてあるとき束さんが提出した論文を読んだのだ

それがISに関する論文

今までの科学の常識を覆すような内容

当然その学会では相手にもされずむしろ笑われたようだ

しかし俺はその内容に興味を持った

書かれている内容は今までの常識からすればありえない内容

しかし彼女の言う定理が本当ならば確かに実現可能な内容だった

俺はもともと自分の目で見ることを文献よりも信じている

なので直接本人に尋ねにいった

最初は束さんは俺が自分の妹と同じぐらいの年であることと他人であることからろくに相手にしてはくれなかった

しかし俺は束さんの論文を何回も読みそれに関する考察を束さんに提出し続けた

そして次第に束さんもとりあつてくれるようになった

今では一緒に研究するほどになっている

しかしだからこそわからないのだ

なぜ束さんは俺と一緒に連れて行ってくれたのか

何度聞いても「それはね〜れ〜くんだからだよ！」とよくわからないことお言われて明確な答えが帰ってこない

いつかわかるといいんだけどね〜

東side

やあやあ天才篠ノ之束だお！だおだお！

今私はれ〜くんと一緒に地球上にあるあるところに隠れている

や〜自分でやったこととはいえなかなか面倒だね〜逃げるのって  
まあ天才の私だからなんてことはないんだけど面倒であることに  
変わりはないんだよね〜

といっても他人に邪魔されることなく研究できるからいいんだけどね

さて、世界に対して逃げている私だけど実はこの旅には同行者が  
いるんだよね！

世界でただ一人、私のISに関してあの『白騎士事件』前に興味を  
もってくれた人物

そしてもしかしたら鍛えれば私をも超えるかもしれない逸材

それがせきれいれい鵲鴿玲くん

通称れ〜くん！！

いや〜まさか世界にはこんな子がいるとはね〜

束さんもびつくりだよ！

最初は特に意識もしないようなどうでもいい存在だった

これは本当

でも彼は私の論文から考えられることを考察して毎日のようにもってきた

最初は面倒だし興味もなかったから読むこともなかった  
でもいい加減うっとおしいので見てみることにした

そして驚いた

まさかここまで理解しているなんて

しかも論文には書いていなかったISのコアの製造方法の考察やそれを集中管理するための方法などの考察書かかれていてそれは私が考えているものと同じかそれ以上のものだった

だから気づいた

彼は0から1を生み出すことはできない

でも1を10や100にすることに關して天才なんだと

だから私は姿を隠すとき彼を連れて行った

私の持ちうる知識のすべてをあたえて彼がどんなものを作るのかに興味があった

なにより彼は初めてISを理解してくれた

たぶん今でも彼以上にISを理解しているのは私以外いない

ちゅちゃんはもちろん篝ちゃんもいつくんも理解できない

それを理解できる初めての存在

だから一緒につれてきたんだ

彼がこれから生み出すであろう物を見せてほしい

どんなすごいものができるのかを見せてほしい



そのためなら私は自分の持ちうるすべてを教える

れ〜くんはよく自分をなんで連れてきたのかを聞いてくる

だから私はそのたびにこう答える

「それはね〜れ〜くんだからだよ！」

せきれいれい  
鶺鴒玲

彼は世界で始めての対等の存在

そして私の持ちうるすべての知識を持つもの

東唯一の弟子（後書き）

感想評価お待ちしております

## IS学園入学「前」(前書き)

なぜか息抜きで書いているほうが更新が早いという・・・

感想評価お待ちしております

## IS学園入学「前」

玲 side

「はあ、IS学園ですか・・・」

あれからいろいろあり俺は14歳になった  
今年で15歳になる俺だが束さんに突如IS学園に入学するよう言  
われていた

確かに俺はISを動かすことができる

これは俺と束さんが一緒にISの開発をしている時にわかったこと  
なのだがどうやら俺は男でありながらISを使えるらしい

原因はわからない

というよりもなぜISが女性にのみ反応するのかもわかったはいな  
いのだからそれも当然かもしれない

これに関しては生みの親である束さんも首をかしげているところ  
ある

世間ではわざと女性にのみ反応するようにしたなどといわれている  
が本当のところはそうではない

もともとISのコアは自己学習をするように作られておりそれが何  
らかの形で変異してしまったのではないかと俺と束さんは考えている  
が、本当のところはわからない

さて、話がそれたが俺はなぜがIS学園へ入学するように言われている

「しかしなんでまた急にそんなことを？」

「それはね、れくんの専用機の試験をするためだよ」

俺の専用機

それは俺を束さんの共同開発により出来上がった世界最強のIS  
しかし俺をベースに作っているため使えるのは世界で俺だけという  
代物である

そしてここでは確かにその性能実験をすることができないのである  
そのため完成はしているし武装も問題はないのだが実際の戦闘はし  
たことがないのである

「あそこは世界の代表候補生とかが集まるから性能実験にはちょうどいいでしょ？」

「まあ、確かにそうですね。でも大丈夫なんですか？俺って一応お尋ね者なんじゃ」

俺は束さんと一緒に行動してるため世界から狙われる立場にある  
しかもおそらくは束さんにつくほどに危険な状況だろう  
仮にも俺は束さんと一緒に行動している

ということは必然的に研究などの情報、現在位置などの情報を持っていると思われるはず

そのため俺が捕まるということはそのまま束さんに迷惑がかかるということになるのだ  
だからこそ俺はためらう

「大丈夫大丈夫！それに今年は篝ちゃんといつくくんが入学するからね。れくくんも一緒に通ったほうが都合がいいんだよ」

「それはどういう？」

「篝ちゃんは私の妹でいつくくんはちくちゃんの弟。そしてれくくんはこの束さんの弟子。ここまで言えばわかるよね？」

なるほど

確かにここまで重要人物を集めておけば逆にそれを狙うものたちをおびき寄せやすい

そもそもIS学園は在学中は外部からの交渉を受け付けられない独立した存在

そして狙ってくる敵がいるのなら俺たちは学園で迎え撃てばいい  
実にシンプルな図式ができあがる

「なるほど。理解しました。あいつらを誘い出すつもりなんですね」

俺は束さんの目的に気がついた

俺たちをひとつに場所にそろえることにより一番食いつくであろう存在がいるのだ

「うん。あのうるさい亡国企業はえを一掃しようと思うんだ」

俺たちは亡国企業とは何かと縁がある

まあ腐れ縁なのでこちらからすれば願い下げなのだが

あそこはISのデータを狙う中でも一番うるさいのである

いままでにも何回も襲撃されている

一度危なくやられるところだったこともある  
それゆえにここいらでたたいておきたいのだ

「なるほど。でもいけるんですかね・・・俺中学も通ってないです  
し」

「心配は要らないよ。なんとかするから。ちゅちゃん」

なんとも見事なまる投げ振りである

「はあ、まあ千冬さんもご愁傷様です」

「あはははで、通ってくれるよね？」

ここで通ってくれない？ではなくくれるよね？と聞くあたりやはり  
東さんだ

先ほどはああいったがもうすでに手を回してあるのだろう

この人はなんだかんだで抜け目がない

いや、実生活では抜け目だらけではあるが・・・

しかしこういったことに関しては本当に抜け目がない

しかもこういうことは必ずといっていいほど事後承諾なのだ

そのため俺が何を言っても時すでにおそいことが多いのである

「ま、いいですよ。こいつの性能実験もしたいですし」

俺は首から提げている黒いペンダントを見せながら言う

こいつは俺の専用機の待機状態である

「あはは、そう言ってくれると思ったよ　じゃあ明日入試に行ってきたね」

「はい、わかりました・・・って明日なんですか!？」

話が唐突過ぎる。すこしぐらい前もって教えてくれてもいいのに。

まあ、束さんはいつもこうだから今更とやかく言うつもりもないけどというよりなんとなくこうなることがわかっていたからなんともいえない気分なわけだが  
すこしぐらいこういつて予想は外れてほしいものなのだが・・・

「<sup>しゅうりゅう</sup>神龍の調整も終わってるんだしちょうどいいよね?」

神龍というのは俺の専用機の名前である

本当はもつとふつうのあたりさわりない名前にしようと思ったのだが束さんが譲らずまあ名前ぐらいでなにか変わるわけでもないの  
そのままになっている

しかしなんとというか中二感ばりばりのネーミングだよね

束さんがいま作ってるISだってなんかそんな感じの名前ついてたし

「はあ、もうすでに決定事項なんでしょ?でも明日ってここからIS学園まで結構時間かかりますよ」

ここ日本からかなり離れたところにある某国のある場所である  
場所は詳しくはいえないのだがすくなくともすぐにつくような場所ではない

飛行機を使ってもかなりかかる距離である

「だから今すぐでもらうことになるね、なにせ待ってるのはち



「ちゃんだから遅れると怖いよ？」

「なにやら面白そうに言う束さん

この人これが目的だな？」

「この人のことだ

「IS学園にしろどこにしろなんだかんだでハッキングして映像を入手するに違いない

そしてそれをみて楽しむということをやるのがこの人なのだ

「やれやれ、こついうところで才能発揮しなくてもいいでしょうに」

「千冬さんですか・・・遅れたら命なさそうですね・・・」

「あの人は時間にするさいからな・・・」

「一応何度か面識はあるのだがそのたびに束さんをアイアンクロード沈めるところを目撃している

「なんとというか人間の限界を超えているような人だからな

「なにせブリュンヒルデなんて呼ばれているのだ

「そのひとにもし本気起こられるようなことがあれば・・・想像したくないな

「はあ・・・命の危機感じるんで行ってきます」

「いつてらっしや〜い」

束さんの満面の笑顔で見送られ、俺はIS学園に向けて出発した

まじで間にあわなかったらどうしよう

そんなことを考えながら俺は飛行機に乗るためにまずはこの山を高速で降りていくのであった

あ、もちろんISSつかってだよ？

IS学園入学「後」 (前書き)

感想などお待ちしております

## IS学園入学「後」

あのあと何とか山を降りることができたのだがそれからいろいろと大変だった

なにせ俺はこれでもお尋ね者

もちろん一般人は知るはずもないことなのだが国の上層部は知っていたりする

なので空港に着くまでいろいろと面倒ごとが多かった

いや、ホントいろいろとあったよ・・・

で、なんとか日本にたどり着きIS学園の前まで来ることができた  
一応俺が来るということは学園側に伝えてはいるはずだから迎えの人がいるはず

あ、ちなみに今日はIS学園の入学式の日らしい

そして俺の試験が行われるのも今日

俺入学式の日にはテスト受けるんかい！！

それってどうなのよと思わないでもない

まあ試験といっても俺は世界で最初の男性操縦者なので間違いなくここには入れるわけだが

世間的には俺ではなく織斑一夏が世界で初めてということになっているが俺がISを起動したのはそれよりもはるかに前なので実質俺が世界初の男性操縦者なのである

それとこつちについてから知ったことなのだがどうやら俺が束さんの研究室から出て飛行機に乗っている間にあの人俺がISを使える男性だということを経界中にばらしたらしい

俺は飛行機に乗っていたためそれを知ることができなかったのだが

俺が飛行機を降りるとそこには取材陣が待ち構えていてそのことを知った

またまた面倒なことをしてくれたよ・・・  
いずればれることとはいえせめてそれは俺が学園についてからにしてほしかった

なにせあの取材陣ほんとしつこいんだよ・・・  
俺が何を言っても後をつけてくるんだよ  
いやほんとやってられないよね

今までも東さんと一緒に世界を逃げてたけどこんなに疲れたことはないよ  
それだけしつこいといふかなんと言つか

あ、ちなみに今も俺の周りをうるうるしてます  
俺が男性操縦者ということは必然的にIS学園に向かうので先回りされてみたいだ

はあ・・・

それにしてもこの学園かなりでかいな  
さすがは世界で唯一IS操縦者を育成するための学校ってところか  
日本も案外金余ってるんだね  
でも残念ながらセキリティのレベルはかなり低いみたいだね  
ここまでの移動中かくるハックしてみたけどかなりあっさりといけ  
たし

仮にもISっていう兵器について教える学校なんだからもう少し危機感持ったほうがいいと思うんだよね

しかもどうやらこの学校相当黒い部分があるみたいだし  
なんせここの生徒会長はなんか暗部組織の党首みたいだしその従者

もここにいたいだし

なんつかホントに安全なのかねこの学園・・・

「お前が鶺鴒玲か？」

「はい？」

IS学園の現状について考えていると急に声をかけられた

声のしたほうを見ると黒のスーツにタイトスカートを身にまとったかなり目がきつい女性が立っていた

そう、織斑千冬である

「お前が鶺鴒玲かと聞いている」

「はい。そうですけど……」

「私はお前のクラスの担任になる織斑千冬だ。東から話は聞いている。ついて来い」

そういつて俺を先導するように歩き出す織斑先生

ていつか俺のこと覚えてないんですね

まああつたのはかなり前のことだしそれも仕方がないといえば仕方がないんだけど

「というか俺入試受けてないんですけど？」

そう、俺は今日ここに来たばかり

なので入試を一切受けていないのである

「ああ、それならば東からの推薦ということで免除になっている」

おいおいそんなん許されていいんだろうか  
改めて束さんの影響力の大きさを知る瞬間だった

「はあ、まあいいですけど」

俺はまあ納得するしかないんだよね

まあ実際入試なんて俺にはあつてないようなものなんだけど

それだけ俺の専用機はおかしな性能してるんだよね・・・

「ところで、お前は専用機を持っているらしいな？」

「知ってるんですか？」

「束に聞いた。なんでもあいつが直々に開発したと言っていたが」

「性格には俺と束さんの共同開発ですけどね」

「あいつの作ったものだから、また突拍子もない機能でもついているんじゃないだろうな？」

おっしゃるとおりです

このISはおそらく現存するどのISと戦っても間違いなく勝てるほどの性能をしてる

しかももともとが俺をベースに作っているため俺の動きや能力に完全についてくる

しかも稀代の天才が自らの知識を総動員して作ったのだから一切の妥協などない

まさにISの完全系といえるものなのである

「あははは・・・おっしやるとおりです」

なのでここは認めるしかないのである

「とりあえずあまり問題は起こさないでくれ・・・」

織斑先生は額に手を当てながらいう  
そつとう苦労しているんですね・・・

「まあ、善処します」

といつても俺も問題を起こさない保障はできないのでとりあえずそ  
ういうしかないわけで

「頼むぞ・・・さて、着いたぞ」

織斑先生に言われて立ち止まりクラスを確認してみると、一年一組  
と書いてあった

ここが俺のクラスらしい

「男子は同じクラスにまとめることになったから織斑もこのクラス  
だ。呼んだら入って来い。いいな」

「はい」

まあ妥当な判断でしょうね

どうあがいたって俺と織斑はこの学園において良くも悪くも目立つ  
存在なのである

それをわざわざ別にするといいことは手間を増やすといふことになる  
ならば最初から一箇所に集めておくにこしたことはないのだろう



まあ、その分担任である織斑先生の苦勞が増えることになるのだが  
なにやら教室内から織斑先生の自己紹介やら女性とに悲鳴やらが聞  
こえて来るんだが・・・  
なかで何が起きているんだろうか？  
知りたいような知りたくないような・・・

「今日からこのクラスで一年間生活していくことになるが、急遽こ  
の学園に通うことになった編入生を紹介する。まあみなあの馬鹿の  
せいで知っているとは思うが、とにかくあまり騒ぐなよ。鵜嶋、入  
って来い」

いや〜やたら馬鹿を強調してますね  
束さんいつも迷惑かけてるからな〜  
もうすこしあの人もおとなしくしていればいいものを  
まあ無理なんだろうけど・・・

とりあえず織斑先生の指示に従い教室に入る  
そしてあたりさわりのない自己紹介をする

「鵜嶋玲です。みなさん知っているとありますが男です。何かと迷  
惑をかけるかもしれませんが一年間よろしく願います」

ま、こんな感じでいいだろう  
こういう機会あんななかったからどういふこと言えればいいかわから  
ないけど  
つかなんかみんな反応ないな？  
もしかして俺やらかした？

「きゃ……」

「ん？」

「キヤー……!!」

うるさ！？つかドンだけ声でかいんだよ！？

鼓膜破れるかと思ったぞ！？

「男子よ！ 二人目の男子！」

「きれいな髪！ きれいな目！」

いやいや俺そこまできれいじゃないんだけど

たしかに生まれつき髪が赤茶色でなぜか目の色が灰色なんだけどそんなにきれいって言われるようなものではないと思うんだけどね

「あの篠ノ之博士の弟子と一緒にクラスなんて！」

……？どういうことだ？

俺が束さんの弟子？

確かに俺はISに関して束さんい教わったけどなんでそれがばれてるんだ？

「鵲鴿……言いたいことはよくわかる。だがあきらめろ、あの馬鹿は自重ということをしなからな……」

俺の言いたいことを察した織斑先生がそういう

なるほど……束さんのせいですか

まあ東さん意外に考えられないんだけどすこしやりすぎなんじゃ？  
ま、そのおかげである意味俺は守られてるんだけどね

でもそれと同じぐらい面倒ごとにも巻き込まれるんだけど・・・

「なんか少し鬱になりそうなんですけど・・・」

「気持ちはよくわかる・・・あいつには昔から苦労させられた」

「「はあ・・・」」

なんか織斑先生と仲良くなったような気がする  
おもに東さんの被害者的な意味で

しかしいい加減この騒ぎを収めないといけないだろう  
織斑先生もそう思ったように声を張り上げる

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を  
半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で染みこま  
せる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私  
の言葉には返事をしろ」

なんと言う鬼教官

つかここはどこぞの軍隊でしょうか？

でも確かに実力はあるのでだれも逆らわない

というよりも単に怖いからなのかもしれないが・・・

そこらへんは東さんと似たところあるんだよね

改めて教室を見渡すと当たり前だが織斑以外は全員女子という空間  
副担任と思われる緑髪の先生。正直先生には見えないが・・・

クラスは全員で31人そして男子は俺と織斑の2人だけ  
というよりもこの学園に男の生徒は2人だけ

総数は忘れたが間違いなく面倒な状況であることにはかわりない

2人意外全員女子という空間

そして束さんによりなぜか知名度急上昇の俺

鬼教官織斑先生

副担任らしいがそうは見えない先生

確実に面倒ごとが起こりそうな布陣だろうこれ・・・

やっぱり来ないほうがよかったかもしれない

いきなりの宣戦布告とフリュンビルデの威圧（前書き）

タイトル長いですね・・・

感想評価おまちしています

## いきなりの宣戦布告とブリュンヒルデの威圧

「織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。これからよろしくな！」

「こつちこそよろしく頼む。俺のことは好きに呼んでくれていい」

「じゃあ玲って呼ばせてもらおうよ」

俺と一夏は1時間目がおわってすぐにお互い挨拶をしていたというのも俺たち意外に男子がいないこの状況ではそれを紛らわすためにもお互いの名前ぐらいは知っておいたほうがいいのである。そして今現在俺たちに突き刺さっているこの視線を紛らわすためにも話相手は必要なのである

ちなみに現在廊下には他クラスの女子、二、三年の先輩も大勢詰め掛けている

なんとというか一昔前のパンダ状態である

「そついえば、玲もIS動かせるんだよな。俺以外みんな女子だと思っただけだからすげーうれしいぜ」

「確かにな。とはいえ俺たち以外全員女子という環境もただけないけどな」

俺たちは雑談に入っている

これもあたりからの視線による圧力を紛らわすのが目的だ  
正直な話あんまり変わらん気もするんだがそれでもなにもしていないよりは幾分ましである

「それにしても玲つて束さんと行動してたんだろ？」

一夏はふとそんなことを聞いてくる

まあ気になるのも無理はない

束さんの他人嫌いはそうとうなものだからな

「まあね。なぜか気に入られたみたいでね。一緒にISの研究したりしてたよ」

「てことはISについてかなり詳しいのか？」

「それなりではあると思うよ。まあまだわからないことが多い分野だから完全に知ってるわけじゃないけど」

ISというのは誕生してからまだ歴史が浅い

そしてそのオーバートクノロジーの塊であるそれはいまだ誰一人として解明しきれていないのである

こういつている玲ではあるが実際のところは束の次にISに関して詳しいのであるが本人は自覚していないようである

と、俺たちがそんな感じで雑談を続けていると一人の女性とがこちらに近づいてきた

「ちょっといいか」

「え？」

突然、話しかけられて一夏が声をあげる

ギャラリーの間では『あなた話しかけなさいよ』という空気と『ち

よつとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』という緊張感が満ちている

そんなに話かけたいなら普通に来ればいいのにね」

一気に来られるのも困り者ではあるのだが少なくとも今みたいに周りにからじろじろ見られるという空気よりはそちらのほうがましである

「……篝？」

「……」

話しかけてきたのは髪をポニーテールにまとめ少し不機嫌そうに見える目をした女子だった

篝という名前らしい

そつえば束さんが『妹に篝ちゃんっていうかわいい子がいるんだよ』』とっていたたような気がする

たしかに美人ではあるかもしれないが俺的にはああいうタイプは正直苦手だな

もつとのほほんとしているとか小動物的なのとかがベストだな！

「廊下でいいか？」

「ああ、でも……」

「一夏はどつちやら俺のことを気にしているらしい

しかし一夏よ、できればおまえの後ろにいる篝さんの様子も気にかけてやってくれ

今も『空気よめよ』的な視線を俺に送っているんだよ  
正直やってられん

「早くしろ」



「早く行け。俺のことは気にしなくていいよ」

「お、おう」

俺はその視線から早く開放されたいという思いから一夏をせかす一夏も俺の言葉を聞きそのまま箕さんと一緒に廊下に出て行ったそれにともない大部分の女性とがそれを追うようになくなったなにやら『ま、まさか抜け駆け！？』とかいろいろと聞こえていたような気がする

大変だね〜一夏

とはいえ今も若干残ってるんだよね  
まあさつきより少なくなっただし俺も暇なのでこっちから声かけてみるか

「えっと、なんか俺に話したいことある人は遠慮しないでいいよ？」  
こういうことで少なくとも先ほどのような視線からは開放されるだろう

「じゃあわたしから〜」

振り返ってみると、明らかに袖の長すぎる制服を着たのほんとした女子だった

なんであんなに袖長くしてるのだろうか

ちなみに周りの雰囲気が変わった

なにやら『先を越された！』的な空気になっているんがそこは気にしないほうがよさそうだ

「わたしは〜布仏本音だよ〜よろしくね〜」

話しかけてきた女性とは布仏本音というらしい  
たしか調べたときに出てきたな

暗部組織更識の従者だったような・・・

こんなのほんとしたのが従者なんだろうか？

人は見かけで判断できないとはいえ明らかに向いているとは思えないんだが

と、そんなことを考えているのだがそんなことは顔に出さずに俺は  
そのまま会話をする

これは束さんとの生活で身についたスキルである

「こちらこそよろしく、布仏」

「本音でいいよ〜私もれ〜くんって呼ぶから〜」

いきなりあだ名で呼ばれるとは・・・いまどきの女子はみんなこう  
なのだろうか

束さんも俺のことあだ名で呼んでたし

しかも奇遇なことにその呼び方束さんと同じだし

まあそもそも俺の名前から考えられるのはそれぐらいなんだけども

「じゃあ本音って呼ばせてもらおうよ」

俺がそういつと本音はうれしそうに微笑んだ

そんなに名前で呼ばれるのはうれしいことなのだろうか？

そうしていると俺の周りには残っていた女子が押し寄せてきた

「私は鷹月 静寂たかつきしずねよ。よろしく！」

それを皮切りにみんな自己紹介を始める  
そんなにいつぺんに来られても困るんだが  
ちなみに最初にここにいた本音はというと・・・

「きゅ〜〜・・・」

つぶれていた・・・  
みんながいつせいに來たせいで逃げるのがまにあわなかったようだ  
人垣に埋もれていた

なんというかこういう状況だということにあれ見るとなんか和むんだよな〜

なんか小動物みたいな印象をうけるんだよ  
とそんなところで救いのチャイムがなった

「あー、チャイム鳴っちゃった。またあとでね〜」

「ああ、また」

俺の周りにいた女子はそれぞれの教室なり机なりに戻っていった  
そして教室にいた全員が座り終えたところに一夏と篤さんが戻ってきた  
篤さんのほうはすぐに席に着いたので問題なかったのだが

「とつとと席に着け、織斑」

「・・・」指導ありがとうございます、織斑先生」

一夏はなにやら考え事でもしていたのか席に着くのが遅れ織斑先生による出席簿攻撃を受けていた  
それにしても痛そうだな・・・

そして2時間目が始まった

「・・・であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ・・・」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生

教壇に立つて、教科書片手に授業を行っている

さっきのHRではかなりおどおどした様子だったが授業になるとその様子は消えていた

とつかかなぜに副担任が授業してるんだ？ちなみに担任は脇で腕を組んで授業を見ている  
たしか副担任の仕事は担任の補佐と担任不在時の代役のはずなのだが・・・

さて、それはおいておくとしてさっきも言った通りこの学園はレベルが高い  
つまりところこの学園に入れるやつはみんなそれなりにできるやつだということになる

そのはずなんだが・・・

もう一人の男である一夏の方を見ると、教科書と山田先生を交

互に見ては、ぱらぱらと教科書を行ったり来たりさせている

さつきから授業には関係のないページを開いては頭をひねっている  
クラスメイトは皆真面目に授業に取り組んでいる

ちなみに俺はこういつた本は読んだことがないためそれなりに新鮮  
なので教科書に目を通して  
もともと俺は束さんに教わったのでこういう本などはよんだことが  
ないのである

『I S』

正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ  
開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器  
を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進  
出よりも飛行パワー・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑  
止力の要がI Sに移っていった

I Sは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるI Sアーマ  
ーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い  
究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエ  
ネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによってあらゆる攻撃  
に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。  
I Sには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、  
操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。ハイパーセ  
ンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断がで  
き、実行へと移せる

I Sは自己進化を設定されていて、戦闘経験を含む全ての経験を蓄  
積することで、I S自らが自身の形状や性能を大きく変化させる「  
形態移行」を行い、より進化した状態になる。第三形態までが確認

されている。コアの深層には独自の意識があるとされていて、操縦時間に比例してIS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりISの性能を引き出せるようになる

コアを製造できるのは開発者である束のみであるが、ある時期を最後に束はコアの製造をやめたため、ISの絶対数が467機となり、専用機を持つ者は特別扱いされることが多い。コアの数に限りがあるため新型機体を建造する場合は、既存のISを解体しコアを初期化しなくてはいけない

まあ、おおむねそのとおりなのだがやはりこれはまだまだ甘いというのが俺の感想である

そもそもなぜコアを束さんが437個しか作らなかつたのかなどに關してなにも考察されていない

教科書であるということを考えてもこれは正直内容としては薄いな

と、それにしても一夏はホントになにやってんだ？

先ほどからなにやら表情も青ざめてきているような・・・

まさかわからないとか言うんじゃないだろうな？

これは基礎どころか常識の範疇のはずなんだが・・・

「織斑くん、何かわからないところがありますか？？」

するとそんな一夏の様子に気がついた山田先生が一夏に対して話し掛けた

一夏ははっと顔を上げてまたなにやら戸惑っている

「あ、えつと・・・」

「分からないことがあつたら何でも聞いてください。なんせ私は先

生ですから!!」

なぜか先生ですからを強調している山田先生

日ごろ先生としての威厳に乏しいのだがこういう態度がさらに威厳を小さくしていることに気がついていないのだろうか？

「・・・せ、先生!」

「はい、織斑くん!!」

一夏はついに意を決したように山田先生に話しかけ山田先生はどんどこいといった感じで返事をしたが、すぐにそれは崩れることになる

「ほとんど全部分かりません!!」

「え・・・??ぜ、全部、ですか・・・??」

・・・おいおいそりやないだろ

さすがに山田先生も予想の斜め上の返事に戸惑っている

「え、えつと・・・、織斑くん以外で、今の段階でわからないって  
いう人はどれくらいいますか??」

山田先生はクラスに対して確認を取る

もしみんなわからないのだとしたらすさまじく問題であるからである  
しかし誰も手を上げない

つまるところわからないのは一夏だけ

問題があるのは一夏だけということになる

「・・・」

それはそうだろう

ここにいるやつらはみなこの程度は理解できなければいけないのだから

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか??」

そんな状況の中さっきまで腕を組んで授業をみていた織斑先生が確認をとる

その表情はまさかよんでいないのか?という顔をしていた

まあ、でもさすがに読んでないなんてことは・・・

「古い電話帳と間違えて捨てました」

・・・あったよ。てかどうすれば電話帳と間違えるんだよ

たしかに電話帳サイズの厚みはあったが普通表紙みて確認するだろ・

・

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者!!」

織斑先生の雷が織斑に落ちる

若干哀れではあるがこれは確実に織斑が悪い

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「あの厚さを一週間で!?無理だつて!」

「やれと言っている」



「・・・はい。やります」

またしても一夏に出席簿が落ちる

そんなにたたかかれてたら脳細胞死滅するんじゃない・・・

さて時間はすすみ今は3時間目  
教壇にたっているのは織斑先生

そのせいかさつきまでの時間よりもクラス内が真剣さで満ちている

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と、授業を始めようとしたがそこで一度織斑先生は止めた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と切り出した

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな」

どうやらこの学園ではクラスの代表を決めなければならないらしく

また、それなりに責任も伴うらしい

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はない・・・が、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるように」

ふむ・・・めんどそうだな

できればやりたくはないがここはIS学園

つまりは俺と一夏を除けばあとは生徒全員が女子

話題に事欠かない俺たちが推薦される可能性は非常に高い

俺としてはやってもいいのだが面倒なのにはかわりない

とはいえ確かに神龍の性能実験をする上でもクラス代表はなっておいて損は無ないように思えるが

やはり面倒なのは嫌いだ

「それで誰か立候補者はいないか?? 推薦でも構わないぞ??」

織斑先生がそついうと早速推薦が出る

「はいっ。織斑くんを推薦します!!」

案の定一夏が推薦される

「私もそれがいいと思います!!」

「私もー!!」

最初の発言に重なるように一夏を代表にという意見が次々に上がる

「お、俺!？」

「では候補者は織斑一夏……ほかにはいないか??もう一度言うが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか??」

「私はれくくんを推薦します」

「なぜに？」

一夏に押し付けられそうだと思った矢先俺の横から俺を推薦する意見が上がる

推薦したのはもちろん口調からわかるように本音だった  
そしてそれに賛同する声多数

「はいはい、私も鵺鴎くんに一票いれまーす」

「私も鵺鴎くんを推薦します」

またしても俺を推薦する声があがる  
ま、予想してたけどね

「候補者は鵺鴎玲と織斑一夏。他にいなければこれで締め切るぞ」

織斑先生がそういうと一人の女子が机をたたきながら立ち上がった

「待つてください!納得がいきませんわ!!」

立ち上がったのはさっき一夏に突っかかってきていたイギリスの代表候補生のオルコットであった

あ、そのとき俺はトイレに行っていました  
なんか面倒な予感がしたので女性とが一夏のところに来た時点で教室から脱走しましたがなにか？

いやね、東さんとの生活でこういう知らないスキルばかり習得してるんだよね〜

「待つてください！！そのような選出は認められません！！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

・・・

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！！わたくしはこのような島国までIS技術な修練に来てるのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

・・・

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！！ISの知識もろくにない極東のサルや、コネでここに入学するような極東のサルがクラスの代表になるなんてありえせんわ！！」

なんかずいぶんと上からな発言だよ

ISの登場でずいぶんこの手の手合いは増えてるらしいんだけど  
実際に見るのは初めてだな

こついうのは束さんも望まないところなのだろうに

束さんのISに寄生する害虫みたいなんだよね

見てて気分悪くなるよホント

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ! 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……!?!?」

なんか一夏が切れた

「あっ、あっ、あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」

「侮辱もなにも、先に馬鹿にしたのはそっちの方だ。違うか?」

「決闘ですわ!」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

今の時代奴隷制度はないはずな何だけどね  
つか俺さつきから空気じゃない？

一夏たちの言い合いに参加してないからね

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そうですか？ 何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

「お、織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

クラス全体が笑う

「なに言ってるんだよ、俺と玲はIS使えるんだぜ？ やってみなきゃわかんないだろ？」

なあ？と言いたげな視線を送ってくる一夏  
ここで俺に振るわけね・・・

「あら、そういえばもう一人いましたわね。影が薄いので忘れてましたわ」

あははは・・・なんつかね〜ずいぶんと命知らずなことだ

「あははは」

「それにしてもあなたはずいぶんと腰抜けみたいですわね」

俺に対しての侮辱を始めるオルコット  
まあほとんど聞き流してるんだけどね

「篠ノ之博士の弟子とかなんとか言われてたのがこんな腑抜けなんて、失望ですわ」

いやいやもともと期待自体してなかったでしょうに  
つか俺が束さんの弟子って知ってるならその発言まずいと思うんだ  
けどな〜

「だいたい「そこまでだオルコット」な、なんですの織斑先生」

なおも言おうとするオルコットを先ほどまで静観していた織斑先生  
がとめる

「オルコット、それ以上言えばお前は間違いなく消されるぞ」

なんとも物騒なことをいう織斑先生

「消されね？なぜですか？」

なんでわかんないんだらうね？

織斑先生も頭を抑えてるよ・・・

「いいかオルコット。そこにいる鵲鴿は東の弟子だ。つまりところあいつのお気に入りとということだ」

「それが、なんだというんです」

「まだわからないか。お前は東に喧嘩をうっているんだぞ？この時代においてそれがなにを意味するのかもわからないか？」

そう

俺は東さんの弟子ということになっている

つまり俺は東さんにコンタクトを取れるということである

そして東さんは自分のお気に入りの人を侮辱されたりするとなにをするかわからないのである

まあ俺がそのお気に入りに入りなのはわからないけどね

「そ、そんな・・・」

やっと自分の状況がわかったオルコット  
というよりそもそも俺に対してじゃなくても相当問題発言してるんだよね

「さらに言えばお前は日本を侮辱していたな？確か文化としても後進的な国だったか？そして私たちを極東のサルとっていたな？だがISの開発者はどこの人間だ？言いたくはないがブリュンヒルデの称号を持つIS使いはどこの人間だ？」

オルコットの発言の問題点を指摘していく織斑先生

そのようすはどこか怒っているような感じだった

なぜならいつも以上に威圧感が半端ではないからだ



やはりブリュンヒルデの称号を持つものだということだろう

「そ、それは・・・」

「わかるな？お前は自分で自分の首を絞めているということが。わかつたらもう少し考えて発言することだな」

織斑先生はそういうと今まで放っていた威圧感を引っ込める  
まあそれでもやはり感じるので怒っているのだろう

「諸君もこれからは十分に考えて発言するように。わかつたな」

「「「はい！！」「」」

みんなそろって返事をする

オルコットは呆然としているようだ

「それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。  
まずは織斑とオルコットで戦い勝った方と鶺鴒が戦う。それでいい  
な」

「はい」

「いいですよ」

「わ、わかりましたわ」

俺たち3人は了承の返事をする

これにより俺たちは一週間後戦うことが決まった  
編入初日からずいぶん面倒ごとに直面するなんてね

まあいい神龍こいつの初舞台には少々物足りないがいい機会と思うことに  
しよう

## 初日終了を寮の部屋（前書き）

今回は作者の好きなあのキャラの登場です

それと感想評価お待ちしております！

## 初日終了を寮の部屋

「うっ……」

一夏は机の上につつ伏せになり唸っている

「い、意味が分からん……なんでこんなにややこしんだ……？」

自業自得だよ……

IS学園に入学する学生は事前に配られたテキストを読んで予習しているためある程度はついていける

しかしながら一夏はそのテキストを捨てるというトーンでもなことをしでかしているのである

そのためついていけないのは仕方ないといえる

「それはお前がテキスト捨てたからだろ」

「う……まあそつなだけどさ」

ちなみに今は放課後

つまり今日の授業はすべて終了していることになる

にもかかわらずいまだここで教科書を開いているのかというまあ、ありていに言えば復習である

とはいっても復習というよりも一夏の場合は1から教えているようなものなのだが

正直ここまで基礎知識に乏しいとは思ってなかった

「勉強に付き合っっちゃってるんだから文句言っな」

「うっ……」

そう、俺は今一夏の勉強に付き合っているのだ

もとをたどれば俺たちは1週間後にオルコットとクラス代表の座をかけて戦うことになる

織斑先生の威圧感が半端ない空間にいるのは非常に疲れたよ……  
今日はすぐに寝ることにしよう

で、戦うにあたって一夏はISに関しては完全なる初心者

そして俺は東さんの弟子でしかもこの学園で一夏以外では唯一の男子生徒

よって一夏は俺になきついてきたわけだ

まあ今後の予定もなかったしそもそも自分の寮の部屋も聞かないと帰れないので時間をつぶす意味もあり一夏に教えているのだが……

「……で、ISはシールドエネルギーが無くなると、動かなくなる。ゲームのHPみたいなものと考えてもらっていい。そしてISには『絶対防御』という能力があり、操縦者に危険が及ぶレベルの攻撃を受けるときに発動して操縦者の命を守られるようになってい。ただ、絶対防御はシールドエネルギーを極端に消耗する。ここまではわかる？」

「あ、ああ。なんとなく」

なんとなくなんだ

まあそこは気にせず先に進む

「じゃあ、次はISの武装についてだ。ISには拡張領域ハススロットというものがあって、そこに武装を量子変換インストールすることができる。武装には初アッセン

期<sup>イコライザ</sup>装備と後付装備の二種類があつて拡張領域パスロットが空いていれば武装を量子変換インストールして戦闘のときに展開オープンと収納クローズができる。第二代だとラフアール・リヴァイブなんかがこの拡張領域パスロットが多くて優れてるんだけど、って一夏聞いてる？」

「ええつと、拡張領域で量子変換で、それで・・・」

はあ・・・

そう、俺が普通に使う単語の意味が理解できていないのである  
それを理解していることを前提で話すとぜんぜん先に進まない  
そのためそのたびに単語の説明をしているのでかなり時間がかかってしまうのである

「ああ、織斑くんも鶺鴒くんもまだ教室にいたんですね。よかったです」

とそんなこんなで一夏に教えるのに四苦八苦していると副担任の山田先生が教室に入ってきた

どうでもいいけどこの先生名前が山田真耶なんだよね  
うえから読んでも下から読んでもやまだまや  
これは狙っているんだろうか？

「はい？」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

どうやら待っていたのがきたようだ

俺はそもそも寝泊りする場所は束さんと行動していたので存在しないのである

しかも俺は立場の関係上むやみに外部で寝泊りするのはよろしくない  
そしてそれは国もわかっているはず  
なのですぐに無理やりでも寮の部屋が手配されるだろうと思ってい  
たのだ

「前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらったという話  
でしたけど？」

「織斑さんと鵜嶋くんは事情が事情なので、安全性を最優先して無  
理矢理変更したそうです。・・・政府から聞きました？」

真耶は最後の部分だけは俺たちにだけ聞こえるよう耳打ちをする  
世界でたった2人のISが動かせる男

かたやブリュンヒルデの弟  
かたや大天災の弟子

解剖してみたい人もいるだろうし俺を使って束さんをゆるそうと考  
えるやつもいるだろうし

俺たちはいまや世界規模での重要人物といっても過言ではない

それをこの横にいる一夏が理解しているとは思えないのだが・・・

「そういうわけで、政府特命もあって、とにかく2人を寮に入れる  
のを優先したみたいです。1ヶ月もすれば個室が用意できますから、  
しばらく我慢してください」

「・・・あの、耳に息がかかってくすぐったいんですが」

「あ、いやっ、これはっ、わざととかではなくてですね・・・!!」

そういう態度をとるからより一層注目を集めているんですけど・・・  
今もクラスに残っている女性とからの視線がきつい状況にいる

「いや、わかってますけど・・・あ、まだ荷物用意してないんで今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら・・・」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

織斑先生登場

なんかこの人が登場するだけで空気が変わるんだよね

さっきまで俺たちに集中してた視線が幾分か減って織斑先生に向いている

どんだけ人気あるんだか・・・

「ど、どうもありがとうございます・・・」

まあそういう反応になるよね

身内とはいえ自分の部屋に入られるのは抵抗あるだろうし

あ、俺？

俺はもともと束さんの研究室にいたわけで部屋なんて適当だったけどもともと部屋っていう概念なかったし別に見られて困るものなんてないしね

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう。鶺鴒のほうはさっきこちらに届いていた。部屋に運んであるから確認しろ」



束さん送ってくれたんですね

一応もしものことを考えて必要最低限のもの  
おもに端末とかは持ってきてるんだとそれはあくまでも最低限だけ  
だからね

正直助かりますよ

「ありがとうございます・・・」

「あ、運んでくれたんですね。どうもです」

上が一夏で下が俺の言葉だ

一夏はなんかすごいテンション下がっている

まあ普通の高校生なら日々の潤いも必要だよな

漫画とかゲームとかそんな感じのものが無いというのはきついかも  
しない

俺の場合はそういうものはやったことないからわからないんだけど  
基本ISSいじりとかばかりやってたしゲームなら束さんが作って  
くれてたし

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七  
時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャ  
ワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が  
違いますけど・・・えっと、その、二人は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

一夏、何を馬鹿なことを言っているんだよ  
普通に考えればすぐにわかることだろうよ

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいの？」

「あ……」

ここには俺ら以外に男子生徒なんていないんだよ？

つまりもともと俺ら男子が風呂に入るなんてことは想定されてないんだよ

トイレは何とかしてみたいけどそれでもかなり教室からは距離あるし

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ だつ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

「シャワーあるならそれで十分ですよ」

もともと俺はそんなに風呂好きじゃないしね

別に嫌いなわけでもないけどシャワーがあるのならそれで十分である

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のような……」

どうしてそうなるんでしょうか？

この人けっこう危ない思考回路してるよね？

織斑先生もあたま抑えてるし……

「なんとというか……ご苦労様です」

「ああ・・・」

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら・・・？」

「鵺鴎くんのぞきに来るかもしれないわね」

「どっちともそれはそれで・・・いいわね」

「織斑×鵺鴎！いける、いけるわ！！」

「織斑くんの中学時代の交友関係を洗って！　すぐにね！　明後日  
までには裏付けとって！」

なんつか腐ってるよね・・・

すると俺の肩を誰かがぼんとたたいた  
横を見ると織斑先生がいた

「気持ちはわかる・・・心を強く持て」

俺と織斑先生の間になにか絆が芽生えたような気がする  
主に面倒ごとが舞い込んでくるポジシヨンの意味で

「えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。二人とも、  
ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

校舎から寮まで五十メートルくらいしかないんですけど  
どうやって道草するんでしょうか・・・  
いや、女生徒という障害があるかもしれないが

そういつと織斑先生と山田先生は教室を出て行った

まだ教室内外であれこれ騒がしい声が聞こえるが、もう今日のところは無視をして部屋に行こう

これ以上ここにいるとさらに面倒な事態になる気がする

俺の直感がそう告げているのでそれは絶対なのだろう

俺たちはすぐに教室を出て行った

その後も教室ではカオスな空間が展開されていたらしいが俺は何も知らない

そう何も知らないことにしておく

---

あの後教室を出た俺たちは特に問題もなく寮にたどり着いた

寮に入ってから別れ際に何かあったときの連絡にと、携帯番号とメールアドレスを交換して俺と一夏それぞれの部屋に向かった

ここでなぞに思っただがなぜ俺と一夏の部屋が別々なのだろうか？  
普通俺たち以外女子しかいないなら俺らが相部屋になると思っただが・・・

ちなみに俺と一夏は両方誰かと相部屋らしい

それと俺の部屋番号は1025番だった

「えつと・・・1025、ここだな」

俺は自分の部屋番号の部屋の前まで来ている

一応かぎはもらっているのだが相部屋ということは俺がいの人に人がいるということだ

もしもなにか取り込み中だった場合迷惑がかかるからな

ここはきちんとノックしてから入るべきだろう



俺はあくまで女生徒と相部屋になるということを聞いていただけで誰とは聞いていない  
なので相手の名前を知らないのだ

「更識・・・簪」

どうやら彼女はここの生徒会長の妹らしい  
言われてみればよく似ているような気がする

「じゃあ更識さんって、苗字で呼ばないで！」っえっとじゃやな  
んと呼べば？」

無難に苗字で呼ぼうとしたら大きな声で拒否されてしまった

「名前・・・で、呼んで」

「じゃあ簪さんでいい？」

「それで・・・いい」

ふむ、なにやらわけありのようだね

そういえばなんでこの子こんなところでISいじってるんだ？  
それに見た感じ完成してないみたいだし

「ところで簪さんはなんでここでISを作ってるの？」

ここは普通に聞くのがベストだろう

たしか更識簪は日本の代表候補生のだったはずだ

つまり専用機は日本から支給されているはずである

しかし今目の前にあるISは未完成のようだ

「あなたには・・・関係ない」

まあそうなんだけどね

でもこのISは早く完成させてほしそうなんだよね

ISのコアには意識がある

それは束さんによく教えられていることでおれ自身ISに乗るときはコアの意思を感じる

それは俺が男子というイレギュラーだからなのかもしれない

しかしそのためなのかはわからないが俺はなんとなくそのISが何を望むかがわかるのである

束さんに言わせればそれはISを真の意味で理解した証らしいけど・・・

よくわからないんだよね

それでこのISは早く飛びたいといってるみたいなんだよね

「よかつたら手伝う?」

なので俺は手伝いを申し出してみる

「いい・・・これは私一人で作らなきゃ・・・意味がない」

「でもはつきり言うけど君じゃ無理だと思っよ」

すこしきついようだがそれが俺の率直な感想である

そもそもIS開発はそんな簡単なものではない

そして少し知識があるからできるというものでもない

この子のISを少し見てみる限りでもかなり無駄が多い

今空中の投影されているディスプレイを見てもかなり無駄だらけ  
こんなプログラムでは正直無理があるのである

使おうとしている技術に追いつかないねこれじゃ  
だから少しきつい言い方になるがはつきりといった

「あなたに・・・なにがわかるの!？」

「自分で言うのも何なんだけど俺は気味よりはISを理解してるし  
君よりも技術は上だと思うよ」

「・・・っ!」

言葉に詰まる簪さん

俺は自分で言うのは何なのだが束さんじきじきに教わっている  
そして今までIS研究の毎日を送ってきたのだ  
そこいらの研究者よりも技術ははるかに上だろう

「今のままこのISを作れば間違いなく動かない。プログラムが甘  
すぎるし無駄が多すぎるんだよ」

「・・・」

「それにこのISは早く飛ばしたいといってるしね」

「?なに・・・言ってるの?」

まあ普通はそういう反応になるよね

俺は馬鹿にされることを覚悟で俺がISの意思を読み取れることを  
話した



「そんなこと・・・あるわけ」

「ま、普通そういう反応すると思うけど事実だよ」

「・・・」

探るような目でこちらを見る簪さん

何が目的かどうか探っているみたいだね

そもそも目的なんてないんだけどね

俺は不完全なものが嫌いなんだよね

束さんに影響されたのかもしれないね

「まあ、信じるも信じないも簪さんの自由だよ。それに俺の助けを借りるかどうかは1週間後の試合を見てから決めるといい」

「試合？」

「クラス代表決定戦をすることになってね。そこで俺の専用機を使うことになる。これは俺と束さんの共同開発だね。これの性能を見れば少しは俺の能力を信用できると思うよ？」

「わかった・・・」

さてさて

これで1週間後の試合は負けられなくなったよ

もともと負ける気はないし負ける可能性もほとんどないんだけど

さくつと勝て簪さんに信用してもらおうとしますかね

俺が手伝いを買って出たのはもちろんISSコアのこともあるんだけどなによりすごく簪さんが助けてほしそうだったからなんだよね

たぶん本人は気づいてないんだろうけどさ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1965ba/>

---

IS-インフィニットストラトス-篠ノ之束の弟子

2012年1月6日21時46分発行